

芙蓉会 (Fuyo Kai)

——ワシントン大学における日系女子学生会と日米戦争——

高木(北山)眞理子

はじめに

1942年3月31日づけのワシントン大学の学生新聞『デイリー (The Daily)』に、編集部あての一通の投書が掲載された。

数週間前デウィット将軍 (General DeWitt) は、外国人であろうとアメリカ市民であろうと、ある特定の集団 (=日系のこと 著者注) を内陸へ移住させると発表した。この命令に影響されない多くのアメリカ人にとって、以前『デイリー』のコラムにボブ・トウィス (Bob Twiss) が書いたような、次のようなコメントをするのは容易いことだろう。「ほんの数百人の人々が命令によって影響を受け、その結果その人たちの生活が中断されてもなんの心配があるう」と。ボブ、そして彼と同様の考え方をする人々は、この命令によって影響を受けるのが、単に数百人ではないということを実感して理解しているのであろうか。実は20万近い¹⁾人たちが影響を受けるのだ。それもその約70パーセントがこの国生まれの市民で、合衆国以外の国も知らない人たちであり、アメリカの民主主義の高尚な理想を愛し、大事にして来た人たちなのだ。

この命令によって影響を受けるアメリカ市民の私たちにとって、この立ち退きの告知こそ、私たちが愛するようにと教えられて来た全てのことへの大打撃であった。戦時であるとはいえ、戒厳令も出されないまま、市民としての諸権利が一時的に否定されてしまうようなことは、合衆国の歴史には例がない。私たちが大い

に懸念しているのは、移動させられたり、新しい土地に再定住したりすることに伴う大変な苦労ばかりではない。この戦争が終わった時に私たちは市民としての諸権利を再び手にすることができるのか、という問題が心配なのである。でも私たちは、政府が私たちを市民として信頼し、市民としての諸権利を再獲得させてくれると信じている。そして再定住が、永久に続く人種差別という結果におわらないことを信じている。人種差別というのは、我々の国が今戦っている敵でもあるのだから。

この退去命令の影響を受ける私たちを経済的に食い物にする人たちがいるのは事実だが、一方で、とても親切に心から心配してくれる人たちもいる。後者の人々のおかげで、私たちはできる限り前進していこうという力をもらっている。私たちの国の未来の指導者たる学生のみなさん、私たちが善良で勤勉な市民であるということに信じていてくださいますように。そのような希望と信念をもって、私たちはここから退去しようと思います。

チヨ・ナカタ
タマコ・イノウエ²⁾

1941年12月7日の朝(現地時間、日本時間では12月8日未明)、ハワイ州の真珠湾が日本軍によって爆撃され、日米間の戦争が始まった。そして年が明けて1942年2月、フランクリン・ルーズベルト大統領が大統領令9066号 (Executive Order 9066) に署名をし、それに基づき、西海岸の特定地域からアメリカ市民を含む全日系人が内陸部に造られる収容所に強制移住させられること

が決定した。大学新聞『デイリー』編集部への投書は、アメリカの太平洋岸ワシントン州シアトル市にあったワシントン大学 (University of Washington) に在籍していた449人の日系学生のひとり、チヨ・ナカタが友人のタマコ・イノウエと連名で出したものである。2人はワシントン大学の日系女子学生会、芙蓉会の役員であり、当時イノウエが会長 (President)、ナカタは通信委員 (Corresponding Secretary) であった。投書にあるように、449人の日系学生は全員、大統領令9066号によってワシントン大学での勉学が中断されることになってしまった。大学の勉学を途中で止められ、生まれ育った家から離れてどこへ連れて行かれるかもわからずに、持ち込みを許可された手に持てるだけの荷物のみを携えて、家族とともに移動させられることになった学生たち。この投書の文章には、日系のアメリカ市民である学生たちの「不安」はもちろんだが、「アメリカ市民としての自負」も滲み出ており、「退去命令」が歴史に前例のない不当な命令であることを訴えつつ、同年代の日系以外の学生たちに自分たち日系の気持ちを書いてある。日系学生のほとんどは、移民としてこのアメリカにやってきた一世のもとにアメリカで生まれた二世であり、生まれながらのアメリカ人だった。彼らには年若い兄弟姉妹のまとめ役のような立場の者も多かった。そしてこの449人の日系学生の約33パーセントがチヨやタマコのような女子学生であった。本稿では、ワシントン大学の二世女子学生たちの組織「芙蓉会 (Fuyo Kai)³⁾」について、ワシントン大学図書館のスペシャル・コレクションに残された同会の議事録 (minutes) を参照しながら概観する。特に1941年の「芙蓉会」の活動と同年12月の日米戦争勃発後の日系学生の状況、そしてその後、本会が解散されるまでに注目したい。

1. ワシントン大学の二世学生組織

第二次大戦前のワシントン州では、日系人口はカリフォルニアほどではないが比較的多く、1940年当時14,565人であった。そのうち8,882人 (約61パーセント) がアメリカ生まれであり、5,683

人が日本生まれ (foreign born) であった。特にシアトル市には貿易商、様々な小売店、ホテル業などに従事する日系人が多かった (表1, 表2, 表3参照)。またシアトル市内にニホンマチがあり、その近郊には日系家族の商店や住まいが集中していた。シアトル市で生まれ育った日系の子どもたちは、日系の比較的多い小学校、中学校、高校へ通った経験を持つ。しかし日系の数が郊外の農業地域よりは多くても、シアトル市内においても日系に対する人種の壁は見え隠れしていた。それは、アメリカ市民権を持つ二世が成長していく中で明らかであった。二世の子どもたちはいわゆる課外活動であるバスケットボールや水泳などのクラブ活動において、また学校での生徒会などの活動において、白人の子どもたちとともに肩を並べて行うことはできなかったのである。それはメンバーシップの規定で入れない場合もあったが、学校によっては慣例的に、日系は生徒会活動には入らないというような場合もあったといわれる。そこで、白人たちの運動系や文化系のクラブに加入することが許されなかった二世たちは、白人の同年代の若者たちが行っている活動を、自分たち自身のクラブをつくることで同様に楽しむようになった。ヴァレリー・マツモト (1999, 2003) は、1920年代、30年代のカリフォルニア州ロサンゼルスで二世女性が成長期にあった頃、様々なスポーツや文化・社交活動を目的に作られたクラブがコミュニティで果たした役割やそれらが二世の人生に及ぼした影響について述べているが、これはロサンゼルスに限らず、西海岸の都市部に育った日系二世にとって共通するものであったといえるだろう。

シアトルにあるワシントン大学では、他の大学と同様に様々なクラブがあったが、いわゆる学生クラブであるフラタニティ (Fraternity) やソロリティ (Sorority) の会員は、白人に限られていた⁴⁾。ワシントン大学の日系男子学生クラブ (フラタニティにあたるもの) は、1922年に設立された大学学生クラブ (University Students' Club) である。会員規定では人種や国籍や信条によって制限されることはないと言われていたが、日系学生

芙蓉会 (Fuyo Kai) (高木)

表1 西海岸主要都市の日本人／日系人口
1940～1960年

都市	1940	1950	1960
Chicago	390	11,233	12,907
Denver	323	3,329	4,816
Los Angeles	23,321	37,809	82,261
New York	2,087	3,716	7,818
Oakland	1,790		
Portland	1,680		2,963
Sacramento	2,879	5,288	8,374
San Diego	828		5,164
San Francisco	5,280	13,762	24,444
San Jose		5,979	10,326
Seattle	6,975	6,837	10,982

出典：Paul R. Spickard, 1996. *Japanese Americans: The Formation and Transformations of an Ethnic Group* New York: Twayne Publishers, p. 170より作成。

表2 西部諸州の日本人／日系人口
1940年～1960年

州	1940	1950	1960
Washington	14,565	9,696	16,652
Oregon	4,071	1,660	5,016
California	93,717	84,956	157,317

出典：Paul R. Spickard, 1996. *Japanese Americans: The Formation and Transformations of an Ethnic Group*, New York: Twayne Publishers, pp. 162-163.

表3 1935年のシアトルにおける日系による
商業トップ10

Trades	Numbers
Hotels	183
Groceries	148
Dye Works	94
Public-Market Stands	64
Produce Houses	57
Gardeners	42
Restaurants	36
Barber Shops	36
Laundries	31
Peddlers (produce)	24

出典：Roger Daniels, 1988. *Asian America; Chinese and Japanese in the United States since 1850*. Seattle and London: University of Washington Press, p. 161.

クラブ (Japanese Student Club, J.S.C.) と呼ばれていたことから、実際の会員は日系学生だったことがわかる。日系コミュニティからの資金援助によって建てられた彼らのためのクラブハウスが、キャンパスから1本の道を挟んで反対側にあった。クラブハウスには日系学生たちのラウンジがあり、遠方からの学生の寮として使われてもいた⁵⁾。一方、ワシントン大学でも次第に増えていた日系女子学生の学生クラブとして、芙蓉会 (Fuyo Kai) が、12人の日系女子学生によって1925年に設立された⁶⁾。このワシントン大学日系女子学生会は、もともとシアトルに1921年に設立された新進婦人会 (The Japanese Progressive Women's Club of Seattle) のメンバーが、大学の学生のみを会員とする会をつくるとして、始めたものであったという。新進婦人会自体は、シアトル市の18歳以上の日系女性会⁷⁾として発足したのだったが4年間活動をした後、1925年2月に新組織をつくる目的をもって解散されている。そしてその意志をついで同年5月⁸⁾に誕生したのが、芙蓉会だったのである。つまり芙蓉会は日系新進婦人会から派生した団体 (spinoff) であったことがわかるだろう。そして芙蓉会という名称は、第2回目の集会で多くの名称候補が出たものの決定にいたらず、その後の特別集会で芙蓉会に決まったことが議事録から確認できる⁹⁾。

新生の芙蓉会の目的は次の3つであった。(1)日系女子学生の親睦を深めること、(2)日本とアメリカの崇高な理想を理解すること、(3)我々の母校に対して奉仕をすること¹⁰⁾。

芙蓉会は会議を開くときちゃんと議事録を残しており、それは今日、歴史史料としての価値を持つ。本論文では、主に日米戦争直前から戦争開始時、そして会の解散の時までに注目するが、平時の芙蓉会の活動を、まずは1941年の1年間の議事録から概観する。

当時、女子大学生たちは大学の授業を受けながら、かなり多彩なイベントを企画、開催していた。まずほぼ毎週、月曜昼食会 (Monday Luncheon) が開かれ、そこで意見交換や事務連絡がなされていた。たとえば、ひなまつり (Dolls Festival) は

毎年の恒例行事だったが、特に新生に当日和服を着るよという連絡が月曜昼食会で行われている。一方で、月一回の月例会 (Monthly Meeting) では重要事項が決められることが多かった。これらの恒例ミーティング以外に特別ミーティングも開催されたし、さらに役員のみでのミーティングもあった。役員の内候補から選挙、決定も会独自のミーティングの中で行い、毎年行われた日系男子学生会 J.S.C. とのダンスパーティーやディナー、会員としての誓約や入会の儀式、そして春のお茶会など、全てについて企画から実行までが会員主体で行われていた。それぞれのイベントにリーダーとサブリーダーが数人割り当てられ、イベントに責任を持っていた。またミーティングはほとんど大学内で開かれたが、会員の自宅や他の場所で行われていた場合もあった。

1941年の議事録で印象的なのは、1月4日の役員会で決められた内容である。新しくできた中国系の学生会とより親密な関係をつくるために、2月14日に芙蓉会と J.S.C. と合同で中国系学生とともに親睦会を開くことが決まっているのである。これは次に会員が集まった Freshman Stunt Night における連絡事項でも、追加イベントとして報告されている。しかし残念ながら2月3日の月曜昼食会でこのイベントが中国系一世からの反対があって中止されたことが報告されている。やはり日本の中国大陸における軍事行動が、シアトルの日系と中国系の大学生たちにも暗い影を落としていたことがわかる。しかし、何よりも日系学生に大きな影を落としたのは、日米戦争の勃発であった。

2. 戦争勃発と二世学生

1941年12月5日金曜日、芙蓉会は12月の月例会の代わりに、ロートン駐屯地とルイス駐屯地の二世召集兵 (draftees) を招いてパーティーを行った。60人位の二世軍人がやってきたという¹¹⁾。おそらく当日は和気あいあいとパーティーを楽しみ、その週末の日曜日に日本軍がハワイの真珠湾を攻撃しようとは誰も思っていなかったであろう。

12月7日の日曜日、誰にとってもごく普通の日曜日であったはずの日は、真珠湾攻撃のニュースによって忘れえない日となった。多くの日系は日本軍がアメリカを奇襲攻撃したというニュースを聞いて「ありえない」と思ったという。しかし日系、特に年長の日系は「以前から日米開戦を恐れ、心配」していた (ダニエルズ 1997 50)。「ありえない」というのは、12月7日に真珠湾攻撃が起こること自体、日系二世も他のアメリカ人と同様に知らなかったのだから、日本軍が実際に攻撃をしたことを聞いて驚いたことには変わりはない、ということである。ロジャー・ダニエルズによると、ある UC バークレーの日系二世学生は、1937年の大学雑誌に次のように書いていたという。

もし日米間に戦争が勃発すれば、我々はなにをなすべきであろうか。……並の言葉で言えば「もうだめだ」と言えるだろう。我々二世が合衆国のため戦いたいと言っても、その機会があるのだろうか。そのようなことは絶対にあるはずはない。……我々の財産は没収され、我々は捕虜収容所に集合させられ、おそらくその場で虐殺されてしまうであろう¹²⁾。

このように様々な不安をかかえながら、翌月曜日を迎え、二世学生も他の大学生もキャンパスに出かけた。この日、12月8日の月曜日、芙蓉会では月曜集会 (Monday meeting) が開かれた。しかし学内の状況は尋常ではなく、その様子は議事録に以下のように書かれている。

緊張した雰囲気が全員をおおい、日米戦争の宣戦布告の悲しいニュース以外何も話すことはなかった。……会長は今後の会の予定に様々な変更があることを伝えた¹³⁾。

12月12日の金曜日には、日系学生の状況を心配した大学教職員の要請で特別集会が開かれ、全ての日系学生が招集された。芙蓉会の議事録には二世を心配して集会に出た教員の名前が書かれている¹⁴⁾。特にクリスマスの時期で遠方からワシントン大学に来ていた学生の中には自宅へ戻りたい者が多くいたので、「銀行預金の引き出し、出生証明書、町を出る交通手段について可能な範囲で

説明がなされた¹⁵⁾」という。

実は、戦争勃発後しばらくの間、日系の運命がどうなるのか誰もわからない状態があり、シアトルでも、アメリカ生まれではない一世でコミュニティのリーダー格であった有力者が次々にFBIの手で逮捕、拘引されていくと、人々の不安は頂点に達していた。アメリカの差別的な帰化法のせいで、アメリカ人になれない一世は、アメリカ社会の中で常に「帰化不能」の外国人だったが、日米開戦後は「敵性の」外国人 (enemy alien) となった。政府の指示により、敵性外国人である日本人の持つ商売の許可証などは無効とされ、銀行預金も凍結された。1941年の12月中は、アメリカ市民であろうとなかろうと、つまり一世であろうと二世、三世であろうと、日系人がある一定の距離以上移動することが制限された。

そのため、ワシントン大学では学生課 (Students Affairs) が二世学生の旅行に必要な書類の情報を集めた。例えば、長距離バスに乗るなら「1. 出生証明書とワシントン大学学生証, 2. 大学の証明書と学生証, 3. 可能なら上記3種全ての書類」といった情報であった。真珠湾攻撃後の1週間で、ワシントン大学では20人近くの日系学生が西部諸州の都市からアメリカの出生証明書を入手するのをサポートしたという¹⁶⁾。

年がけて1942年、芙蓉会は1月から通常の活動を始めた。まず大きな変化は、芙蓉会の会長 (President)、キヨシ・カミカワ (Kiyoshi Kamikawa) の辞任であった。芙蓉会の議事録には、1942年1月11日にタマコ・イノウエの家で行われた役員会 (cabinet meeting) で、会長のカミカワが大学を自主退学し、会長の座を退いたので、自動的に副会長だったイノウエが会長に就任するとある¹⁷⁾。カミカワが自主退学した理由は議事録にはない¹⁸⁾。この役員会では、その後の芙蓉会の細かい予定が決定されている。例えば1月25日に芙蓉会の新入会員の入会宣誓式が執り行われる事となり、その際、新入会員は全員ヘアカーラーを身につけてくること、という、いかにも入会宣誓の儀式らしく、笑いを誘うような取り決めも記録されている。役員会の翌日、1月12日の月曜集會

で、カミカワの辞任が全会員に報告された。またこの月曜集會では、日系男子学生の学生会 J.S.C. の会長アンディ・モリモトから Defense Bond (国防債券) 購入の資金調達のために金曜日 (1月16日) にダンスパーティーを開催する際の協力を求めてきたという報告もなされた。このように、芙蓉会の子学生たちの日常は、日米間の戦争中という非常事態のため、一方では、戦時公債の購入、赤十字やJACLへの寄付が行われ、アメリカ・フレンド派奉仕委員会のフロイド・シュモア (Floyd Schmoer) 先生 (ワシントン大学教授) を講師に招いて講演をしていただく予定をたてるなど、平和時とは違う活動を行っていた。しかし他方では、学生会としての楽しみを前面に出した活動も行っていた。特に戦争が勃発して日系を含む多くの学生が不安をかかえているときに、芙蓉会新聞『FULCRUM』を再刊¹⁹⁾し、パーティーを行い、アメリカ人学生として積極的に戦争協力をしつつ、学生としての楽しみをなくさないよう努めていたのが窺われる。

2月6日の月曜集會では、芙蓉会の新しい活動について提案がなされ、屋外活動委員会 (Outdoor Activities Committee) と国内及び海外事情委員会 (Domestic and Foreign Affairs Committee) の二つが新設された。この集會の時点で前者ではすでに第1回の遠足を2月22日に計画しており、後者では、ディスカッショングループをつくろうとしていた。さらにこの日の集會の議事録には、芙蓉会が長年クラブハウスを入手することを「夢みて」いたことが述べられ、それについての話し合いの記録が残っている。日米戦争という事情を鑑み、芙蓉会の子学生は、今クラブハウスのための家を買うことは非現実的と考え、貯金していたお金を他の用途に使うべきではないかと話し合った。その結果、500ドルの債券を1枚、50ドルの債券を2枚買うという結論に達した。そして卒業生にも相談すると議事録に記されている。

1942年2月19日、フランクリン・ルーズベルト大統領が「大統領令9066号 (Executive Order 9066)」を發布し、「特定地域から住民を排除する権限を、陸軍長官および各司令官に与え」た (岡

部 1991, 6)。この結果、合衆国西部の軍事特定地域と定められた地域内に住む日系（敵性外国人であろうとアメリカ市民であろうと）全てを根こそぎ立ち退かせることが可能になった。その数は12万近くとなることが明らかになった。そして改めて付言する必要はないかもしれないが、このような措置は、同様に今回の戦争においてアメリカの敵であったイタリア人（系）、ドイツ人（系）には適用されなかった。それ故、この措置は明らかに人種差別だった。

ワシントン州シアトル市は、軍事特定地域に入っていた。この日から3月2日まで、芙蓉会の議事録にはエントリーがない。公式の集会が開けなかったのか、集会はあっても議事録に残されなかったのかは定かではない。しかし、議事録にエントリーがないという事実が、大統領令9066号の日系コミュニティに与えた衝撃の大きさを物語っている。そして3月2日付けで、デウィットは公共布告（Public Proclamation）No. 1を発令し、特定軍事地域を確定し、そこにいる住民の強制移動が行われうることを示した。この結果、近い将来の日系住民の強制移動が確実となった。

芙蓉会議事録の次のエントリーは3月2日であった。ここではまだ上記のデウィットによる布告にはふれられなかった。この集会では会長のイノウエから会員の学生たちへ赤十字（Red Cross）への奉仕活動をしてほしいといった依頼がなされたのみであった。しかし翌日の3月3日にはJ.S.C.のクラブハウスで全日系学生のミーティングが行われたことが、議事録に残されている。ここでは、西海岸から内陸部への強制立ち退き（Evacuation）に関して、フレンド派のシュモー先生が話をしている。そして芙蓉会では当初予定していた新役員を選挙を取りやめるという報告がなされた。議事録にはその理由として、「立ち退き令が間もなく出される状況をみれば、新役員選出をしないほうが賢明であると判断されたから」と書かれている。

3月9日の月曜集会では、冬学期（Winter Quarter）の最終日に芙蓉会晩餐会（Banquet）開催が決定された。次の16日の月曜集会で、会場

がGyokko Yen, 6時開始、会費が75セントと決まった²⁰⁾。そして晩餐会当日には、その詳細記述は全くないものの、エントリーはあり、晩餐会後に短い集会があったことがわかる。

3月22日にチヨ・ナカタの家で、芙蓉会役員と同窓会員との役員会が行われた。これが芙蓉会議事録の最後のエントリーとなっている。

芙蓉会の所有物を処分する方法を話し合うために会議がもたれた。特に準備金（reserve fund）とひな人形（Japanese dolls）の処分である。会議では結論はでなかったが、いくつもの意見が出された。

1. J.S.C.の暖房機のローン返済に準備金をあてる。
2. 強制収容されたときのために準備金をとっておく。その際何か建設的な用途に使う。
3. 人形を、興味をもってくれているグループに全て差し上げる。おそらく最もよいプレゼント先は大学であろう。
4. 皿やテーブルクロスなどのその他の品については、日系に助力してくれた人々に差し上げる。

この日に芙蓉会の所有物の処分を話し合ったということは、立ち退きが逼迫してきたことを物語っている。実際、ピュージェットサウンド湾にあるペインブリッジ島の277人の日系住民はワシントン州のどの日系人よりも先に、3月30日にマンザナー収容所へ連れて行かれたのだった。その後、芙蓉会は4月25日に解散した²¹⁾。

3. ワシントン大学による日系学生への援助

2月に大統領令9066号が下り、その後3月2日のデウィットによる布告があったため、日系学生を多く在籍させているワシントン大学では、このままでは日系学生が勉学を途中で放り出さなくてはならなくなることを心配した。そしてリー・ポール・シーグ学長（President Lee Paul Sieg）は、日系学生を西海岸軍事特定地域以東の大学に転学させる便宜をはかろうと働きかけ始めた。シーグ

学長は多くの大学の学長宛に手紙を送った。その中で学長は、「自分は日系アメリカ人学生のアメリカ性を信じている。転住所 (the relocation assembly centers) に移動しなくてはならない自分の学生をどうかそちらの大学で受け入れてほしい」という願いを述べた²²⁾。30校ほどの大学に送った手紙に対して、12校から返事が送られて来た。そしてそのうち10校が日系学生の受け入れを了承した。しかし中には条件をつけてくる大学もあった²³⁾。

東部にあるオベリン大学 (Oberlin College) は中でも積極的に二世学生を受け入れた大学である。シーグ学長の手紙に対してオベリン大学のウィルケンス学長 (President Wilkens) はすでに名前のあがっていた4人の日系学生の受け入れを了承した。それだけでなくコミュニティ支援なども申し出た。その結果、オベリン大学に学ぶ日系学生の数は、1941年の2人から、1943年には20人になった。

また、日系学生が東部の大学に転学するためには戦時転住局 (War Relocation Authority) や陸軍省 (Department of War) から複雑な手続きを要求された。様々な書類を作成し手続きを踏むのは学生本人だけでなく、日系学生を受け入れる大学も同様だった。受け入れ許可をとる必要があったからである。そしてやっと全ての手続きを経て、故郷を離れて目的地に向かっていても、その途中で足止めを食うことすらあった。転学先ミネソタ大学に向かっていてワシントン大学生クロダ (Kenzo Kuroda) は、アイダホ州ナンパ (Nampa) で拘留されてしまった。クロダはワシントン大学の男子学生部長 (Dean of Men) ニューハウス (Dean Newhouse) に電報を送って助けをもとめた。ニューハウスは現地のメソヂスト教会のウォーカー牧師 (Pastor Leroy Walker) にクロダの力になってくれるよう依頼し、その結果、クロダは無事に釈放されてミネソタ大学に行き着くことができた。ウォーカー牧師はニューハウス部長に、日系学生が公平に扱われるように最後まで目を届かせたその気配りを賞賛する手紙を書き送っている。同じアイダホ州では、アイダホ大学

(University of Idaho, Moscow) に入学許可をもらった6人の日系学生が現地町民による退去要求にあった²⁴⁾。そのうち2人の女子学生は、町民のリンチにあうかもしれないという理由のもと、町の刑務所に「保護」されることになり、凍り付くように寒い刑務所の中に入れられた。そのときのできごとは後に JACL (Japanese American Citizens League, 日系市民協会) の機関誌「パシフィック・シティズン (Pacific Citizen)」に掲載され、女子学生たちの恐怖と寒さに震えた経験が語られている²⁵⁾。この6人の学生たちは結局アイダホ大学ではなく、州境をはさんでワシントン州側にあったワシントン州立大学 (Washington State College, Pullman) に受け入れられた。この大学は同じワシントン州でも軍事地域外であったため、この地域にいた日系は強制収容されることはなかったのである。

シアトルの日系が強制移住させられる日が近づいてくると、ワシントン大学では転学をする学生たちの書類発行で多忙になっていった。ワシントン大学で日系学生の転学をすすめていたオブライエン (O'Brien) は、5月中旬までに「58人の日系学生が全米の12の州にある、15の大学に転学した」と報告した²⁶⁾。

また、ワシントン大学はシーグ学長のもと、卒業間近の最後の学期を中断されてピュアラップ (Puyallup) やその他の集合センターに移動させられた最終学年の学生たちに、最後の学期を修了しなくても卒業の学位を与えることを決定した。そして、11学期をきちんと修了して、12学期目に強制移動させられた学生たちに学位を授与するため、学長と学部長らがピュアラップ集合センター (Puyallup Assembly Center) を自ら訪れたのだった。

4. 収容所から出る

芙蓉会の女子学生たちの多くは、ピュアラップ集合センターに家族とともに移動して来た。ピュアラップ・センターは、いわゆる西ワシントン (West Washington) 地区にあった広い屋外催事場 (fairground) であった。その広い土地に、当局の

呼ぶ「アパートメント」がつけられた。それは、壁は板張りで窓が家族用の各部屋に1つしかなく、床も土のうえにすぐに板をはったような急ごしらえの長屋式の「住居」で、1つの建物がいくつかの部屋に仕切られ、一部屋に1家族があてがわれた。そこに7,500人ほどの日系人が、内陸に「恒久的な」収容所が完成するまで収容されたのである。収容所内の1家族が一部屋というプライバシーのなさや、トイレやシャワーの不便さ、食堂での長い列、特に初期の食事のひどさなどは、今はよく知られている。そしてこのような状態は、その後移動する先のアイダホ州のミニドカ収容所 (Minidoka Relocation Center) も、さらにどの収容所もさして変わらないものであった。そして忘れてはならないのは、ピュアラップのような集合センターも、ミニドカ強制収容所も、有刺鉄線で囲まれ、自由に入出入りできないこと、監視塔には銃をもった兵士が見張りをしていたことである。明らかにこれらの場所は、日系アメリカ市民の基本的な市民権である自由を奪っていた。

手に持てるだけの荷物しか許されない中で、芙蓉会の役員は、芙蓉会の便箋のレターヘッドになる鉛の鋳型 (slug) や、議事録などを持って移動していた。芙蓉会の通信委員で、小稿の冒頭にあげた新聞への投書を書いたチヨ・ナカタは、会の名前の入った鋳型 (slug) をずっと保管していた。チヨは大統領令9066号が出て、日系の強制収容が決まった時、最終学年の12学期目であった。チヨはシアトルの日系が強制的に移住させられる前にロバート・マサノリ・ホリウチと結婚したという²⁷⁾。それは、強制収容が現実としてせまってきた今、もし結婚していなければ恋人同士の2人は別々のところに収容されてしまうかもしれないと考えたからだった。チヨはピュアラップにやって来たシーグ学長や学部長らからワシントン大学卒業の学位を受け取った。この強制移住は、多くの日系人の人生に多大な影響を与えたが、チヨも同様で、この強制移住がきっかけで大学卒業、結婚という人生の大きな変化が、彼女に突然訪れたことになる。

アイダホ州につくられたミニドカ強制収容所に

夫とともに移動したチヨは、「日系の強制収容は間違っていると信じていた²⁸⁾」。そこで、高等教育継続を希望すれば収容所からの出所許可ができるという話を聞くと、2人はすぐに受け入れてもらえる場所を探し始めた。オブライエンらがワシントン大学日系学生の転学先を探したときの手続きが複雑だったのと同様、チヨたちのように既に収容された二世は、収容所からの出所許可と、行き先の大学からの入学許可をもらうだけでなく、行き先での生活の保証も必要であった。とにかく一日でも早く収容所から出ることをめざし努力を重ねた結果、2人は収容所を出て、コロラド州に行くことができた。まずボルダー (Boulder) に移住し、1年後に夫はデンバー大学 (University of Denver) でビジネスを専攻することになり、2人はデンバーに移った。とにかく2人は有刺鉄線の「外の世界」に出たのだった。

「私たちはミニドカ収容所から外に出た最初のグループだったのよ。」

チヨにとって、アメリカ政府による日系市民の収容は、根底から間違っていることだった。それを許せなかったからこそ、彼女は果敢に出所する道を、いち早く切り開いたのである。

5. おわりに

1970年代のある日、芙蓉会の名前が入ったレターヘッド用鋳型 (slug) を見ていたチヨは、「あのときの女子学生たちはみんなどうしているのだろうか」と考えた。チヨはいち早く夫とともにミニドカを後にしてコロラド州へ向かい、その後ずっとデンバーに住んでいた。コロラドで家族を育み、40歳になってから大学院に進んだチヨは、Ed.D. (教育学博士号) を取得し、仕事を得て社会で活躍して来た。1981年、仕事でミネソタ州を訪れたときに芙蓉会の友達と再会し、2人は同窓会 (Reunion) を開こう、ということで意気投合した。それから7年後の1988年8月2～3日、ついにその夢は実現したのである。彼女たちにとって芙蓉会の活動は、青春時代の楽しい日々という面もあっただろう。しかし、芙蓉会が存在したのは、当時の大学に人種差別が存在したという証

でもあったのである。

戦前の日系の若者にとって、日系だけの運動系や文化系のクラブは必要な組織であった。彼らは、自分たち日系（非白人）を排除する様々な白人の組織に対応するような組織を自らつくり、その中で、当時流行の若者文化を謳歌してきたのだった。ワシントン大学の日系学生会も同様であった。芙蓉会に集まった日系女子大学生は、白人のいるグループの中では行くことのできなかったようなリーダー格の仕事をこなし、その中で社会に出るときに役立つスキルを身につけた。しかし、「人種差別」さえなければ、異なる学生生活があったかもしれないのである。突然訪れた日米戦争は強制収容というさらに厳しい試練を日系に与え、彼ら日系の若者の将来は閉ざされてしまうようにみえた。しかし、日系の若者の教育機会を閉ざしてはならないというワシントン大学のシーグ学長やオブライエンを委員長とする学生転任委員会の人々、さらに全米の同様の気持ちをもった人々のおかげで、中西部や東部の大学へ転学・進学できる道、そして軍事地域以外の土地での就職の道も開かれたのだった。日米戦争勃発で、日系11万7,000人ほどが強制収容されたが、いったん収容所を退去する許可がおりると、年長の日系二世たちは中西部や東部の大学、就職先に向かって次々に旅立っていったのである。芙蓉会最後のメンバーも、それぞれ様々な道へ進んでいった。

そして1988年の芙蓉会の同窓会には95人のワシントン大学女子学生会「芙蓉会」の会員だった人々が集まった。彼女たちは全米のあらゆるところから、そればかりか、日本在住者は日本からやってきた。彼女たちは「大学での日々」「強制収容」「その後」の思い出を語り、苦難の日々をいかに乗り越えたかの各々の経験を共有し合ったのである。同窓会のブックレットには、情報をよせてくれた人々が後に手にした学位の簡易統計があげられている（表4）。個人の情報ページからは、ワシントン大学での教育が中断されてから他の大学に移ったもの、大学院に進んだ者、結婚したものの、就職をしたものといろいろであったことがわ

表4：芙蓉会同窓会アンケート回答者の取得学位
(複数回答あり)

B.A.		M.A. or M.S.	
Fine Arts, Music	9	Education	3
English	8	Nursing	3
General Studies	6	Sociology	1
Economics	6	Liberal Arts	1
Sociology	5	Religion	1
Business Commerce	5	Foods and Nutrition	1
Education	5	Library Science	1
Far Eastern Studies	3		
Home Economics	3	DOCTORATES	
Literature	1	M.D.	4
Political Science	1	Ed.D.	1
Psychology	1	J.D.	1
History	1		
B.S.		POST GRAD CREDENTIALS	
Nursing	10	Education	3
Home Economics	7	Occupational Therapy	2
Pharmacy	4	Engineering/Computer	2
Pre-Medic	3	Dance	1
Business	2	Business College	1
Chemistry	2		
Education	1		

出典：A Reunion Celebration: Of University of Washington Pre World War II Japanese American Women Alumnae, held on August 2 and 3, 1988 at the University of Washington Faculty Club and Nippon Kan Hall, Seattle, Washington, p. 11.

かる。この学位統計をしたチヨ・ナカタ（・ホリウチ）は最後に付け加えている。「強制収容は教育を中断したのだろうか。実は13人が学位を取得できなかったようである」と。

2008年5月18日、ワシントン大学は、大統領令9066号に基づいて行われた強制収容によって、ワシントン大学での勉強の中断を余儀なくされた449人の日系学生全てに、名誉学士号をおくった。この式典はLong Journey Homeとなづけられた。その中にはチヨ・ナカタ・ホリウチの姿もあった。

(謝辞)

本小論は、筆者が2011年にワシントン大学アメリカン・エスニック・スタディーズ学部で在外研究をさせていただいたことで可能になった。1年間の在外研究を許して下さった愛知学院大学、受け入れて下さったワシントン大学のアメリカン・エスニック・スタディーズ学部、およびワシントン大学図書館の皆さんに心よりお礼を申し上げたい。ありがとうございました。

小論を書くにあたり、Chiyo Nakata Horiuchi氏と Lynne Horiuchi氏のご協力に心より感謝申し上げます。

註

- 1) 現実には12万近くが強制移住の対象となった。
- 2) 新聞の投書欄には差出人名がChiyo Nakate, Tamako Inouyeとある。Nakateとプリントされねばならないところ、aがeになってしまっているのが分かる。編集者が日系の名前に不慣れであったのかもしれない(下線は筆者)。
- 3) 資料内ではFuyo Kaiという表記のみであったが、花の名前であることがわかっているので、本小論での表記は芙蓉会とした。
- 4) それはUCLAについてマツモトや松盛(2010)が書いている状況と同様であった。
- 5) “Regular Joes & Betty Coeds — Japanese Students at the UW,” *Interrupted Lives* (http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/interrupted_lives/regular.shtml) より。
- 6) 日系アメリカ人の女子学生会としては、かなり歴史が古いものであると思われる。
- 7) Japanese Progressive Women’s Club of Seattle も実は Seattle Girls’ Clubのメンバーがつくったとされている。(A Reunion Celebration: Of University of Washington Pre World War II Japanese American Women Alumnae 1988, pp. 5-7.)
- 8) 1988年のReunionのブックレットには、6月とあるが、芙蓉会の議事録には1925年5月14日に最初のミーティングが開かれた記録があるため、5月に発足と考えるのが自然であろう。
- 9) 芙蓉会の同窓会開催の際につくられたブックレットによると、シゲ・タカイ (Takai, Shige Kanow) の姉、スミコ・タカイ・テラダ (Sumiko Takai Terada) が芙蓉会の創立メンバーで、その姉が会のエンブレムやピンをデザインした。シゲの記憶によると、芙蓉会と名付けたのは姉で、2人の父であるゲンキチ・タカイ (Genkichi Takai) が提案したものであったという。芙蓉会とは Hibiscus Club のことであるとブックレットには書かれている。
- 10) “Regular Joes & Betty Coeds — Japanese Students at the UW” より。
- 11) Fuyo Kai, Minutes, Dec. 5, 1941 (Vol. 3, p. 16). Fuyo Kai records, 1936-1988, University of Washington Libraries Special Collections.
- 12) ロジャー・ダニエルズ著、川口博久訳 1997=1993 『罪無き囚人たち——第二次大戦下の日系アメリカ人』南雲堂。p. 50.
- 13) Fuyo-Kai 1941. Minutes, Dec. 8, 1941. (Vol. 3, p. 17).
- 14) Sociology Department of the Mr. O’Brien と Mr. Steiner, Dean of Men の Mr. Newhouse, Dean of Women の Miss Ward, そして Assistant to Dean to the Men の Mr. Adams の名前が列記されていた。
- 15) *ibid.*
- 16) “Phase I — Loyal Citizens of a Nation at War,” *Interrupted Lives* (http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/interrupted_lives/regular.shtml) より。
- 17) Fuyo Kai. 1942. Minutes, Jan. 11, 1942. (Vol.3, p. 18).
- 18) “History of Fuyo Kai”, in Booklet, *A Reunion Celebration: Of University of Washington Pre World War II Japanese American Women Alumnae, held on August 2 and 3, 1988 at the University of Washington Faculty Club and Nippon Kan Hall, Seattle, Washington*. このブックレットには多くの同窓生の消息が書かれており、1942年1月に芙蓉会会長を辞任したキヨシ・カミカワ (Kiyoshi Kamikawa) が、シアトルの日系が大挙してピュアラップへ強制移住させられる前に、自主的に Salt Lake City に移住したことがわかる。強制移住命令の前には、日系人が軍事特定地域から外へ自主的に移動できる期間もあった。
- 19) しかし、再刊して1回しか新聞を刊行することができなかった。
- 20) 会費納入済みの会員は25セントの割引が既に前の集会で決定していた。
- 21) “History of Fuyo Kai”, in Booklet, *A Reunion Celebration: Of University of Washington Pre World War II Japanese American Women Alumnae, held on August 2 and 3, 1988 at the University of Washington Faculty Club and Nippon Kan Hall, Seattle, Washington*, pp. 5-6.
- 22) “Phase II — A Place for Some of Our Best Students,” *Interrupted Lives* (http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/interrupted_lives/regular.shtml) より。シーグ学長はアイダホ大学 (University of Idaho) の学長に3月6日に、そしてオベリン大学 (Oberlin College) の学長に3月10日に手紙を書き送っている。
- 23) *ibid.*, コロラド大学 (University of Colorado) は、学生がアメリカ市民であることなどに加え、学費が

- 十分に払えることや自活できること、さらに州外学生の学費を払うこと、など経済的に豊かではない学生にはなかなかできない条件をつけている。
- 24) 島田 2005. 「第二次世界大戦下の二世教育」 p. 297.
- 25) “Phase II — A Place for Some of Our Best Students,” *Interrupted Lives* (http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/interrupted_lives/regular.shtml) より。
- 26) *ibid.*, オブライエンはワシントン大学につくられた学生転住委員会 (Student Relocation Committee) の委員長として二世の転学に尽くした。この委員会は、1942年5月に全国日系アメリカ人学生転住評議会 (National Japanese American Student Relocation Council, NJASRC) が発足する際、他の同様の委員会とともにこのより大きな全国的な組織に統合された。オブライエンは後にワシントン大学を休職して NJASRC のディレクターの職についた。
- 27) チョ・ナカタ・ホリウチへの筆者による電話インタビュー。2012年2月17日。
- 28) *ibid.*

参考文献

- A Reunion Celebration: Of University of Washington Pre World War II Japanese American Women Alumnae, held on August 2 and 3, 1988 at the University of Washington Faculty Club and Nippon Kan Hall, Seattle, Washington.* ダニエルズ, ロジャー (川口博久訳) 1997. 『罪なき囚人たち——第二次大戦下の日系アメリカ人』南雲堂
- Daniels, Roger 1988. *Asian America; Chinese and Japanese in the United States since 1850*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Fuyo Kai records, 1936-1988. University of Washington Libraries Special Collections.
- Horiuchi, Chiyo (Nakata). 筆者によるインタビュー。

- 2012年2月17日 .
- Kashima, Tetsuden, Mudrock, Theresa & Sumida, Stephen. 2011. *Long Journey Home: UW Nikkei Students 1941/1942-2008*. Seattle: University of Washington.
- 小平尚道 1980. 『アメリカ強制収容所——戦争と日系人』玉川大学出版部
- 松盛美紀子 2011. 「戦前日系アメリカ人の大学進学とエスニック学生組織の設立——UCLA のソロリティー-Chi Alpha Delta を中心に——」『移民研究年報』第17号 日本移民学会 pp. 83-95.
- Matsumoto, Valerie J. 1999. “Japanese American Women and the Creation of Urban Nisei Culture in the 1930s.” In *Over the Edge: Remapping the American West*, edited by Valerie J. Matsumoto and Blake Allmendinger. Berkeley: University of California Press. pp. 291-306.
- . 2003. “Japanese American Girls’ Clubs in Los Angeles during the 1920s and 1930s.” In *Asian/Pacific Islander American Women: A Historical Anthology*, edited by Shirley Hune and Gail M. Nomura. New York: New York University Press. pp. 172-187.
- 岡部一明 1991. 『日系アメリカ人強制収容から戦後補償へ』岩波書店 (岩波ブックレット No. 234)
- Okiihiro, Gary Y. 1999. *Storied Lives: Japanese American Students and World War II*. Seattle and London: University of Washington Press.
- 島田法子 2005. 「第二次世界大戦下の二世教育」吉田亮編『アメリカ日本人移民の越境教育史』日本図書センター pp. 277-302.
- Spickard, Paul R. 1996. *Japanese Americans: The Formation and Transformations of an Ethnic Group*. New York: Twayne Publishers.

参考 URL

- Interrupted Lives* (http://www.lib.washington.edu/exhibits/harmony/interrupted_lives/regular.shtml)